THE KYOTO UNIVERSITY MUSEUM

Newsletter No. 53

November 2021

京都大学総合博物館ニュースレター



企画展「増田友也の建築世界――アーカイブズにみる思索の軌跡」（2 ～ 3 ページに関連記事）

2021 年度企画展
「増田友也の建築世界――アーカイブズにみる思索の軌跡」..... 2
総合博物館コレクション研究〈13〉魚類相研究と標本..... 4
企画展「医師になる！ 京都大学の医学教育」オンライン講演会..... 6
白眉研究者の紹介 6
研究資源アーカイブ通信〈23〉（2020 年 10 月～ 2021 年 9 月）..... 7
総合博物館日誌（2021 年 7 月～ 10 月）..... 8

2021 年度企画展

「増田友也の建築世界 ――アーカイブズにみる思索の軌跡」

会期：2021 年 10 月 27 日（水）～ 12 月 12 日（日）

日本にかぎらず，世界中の建築学科で建築家が実務教育にあたっています。京都大学の建築学科でも，1950 年代から 70 年代にかけて増田友也教授（1914–1981）が活躍しました［写真 1］。増田教授の建築作品には，京大関係者なら誰もが知っている京大総合体育館（1972 年），生協の食堂がある工学部 8 号館（現・総合研究 8 号館，1972 年）など多数あります。また，研究者としては建築論を専門とし，現象学を取り入れた建築空間の分析，禅僧道元の思想による中世石庭の風景の解釈，そしてハイデガーを援用した建築の存在論の論究などに携わりました。生涯一貫してつくり続けたコンクリート打放しの凛々しい建築作品と，難解で深遠な建築論が学生に絶大な影響を及ぼし，多数の優れた建築家と研究者を輩出しました。

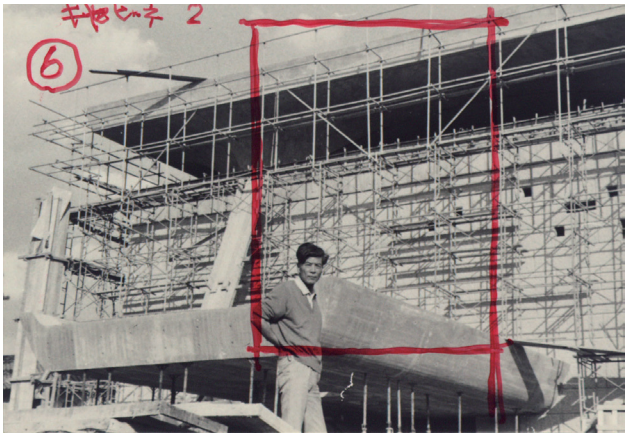


写真 1：建設現場の増田友也（1966 年）

アーカイブ化された資料

建築家はつくろうとする建物の姿を求めて，膨大な量のスタディ図面を作成します。いくつも別案を作成し，部分を検討し，赤字で修正し，また模型を制作し，そうして建物に設計思想を吹き込んでいきます。増田友也はゼミ生，助手，OB の建築家たちとともに，アトリエと呼ばれた吉田キャンパス内の小さな建物で設計活動を行い，図面やスケッチ，あるいは模型，建設現場や竣工建物の写真などが蓄積されました。増田が京都大学を退官したのは 40 年以上前の 1978 年ですが，残された資料は弟子の前田忠直先生によって大切に保管されてきました。その中には，増田友也の直筆の研究ノートやメモ，論文草稿，収集した論文のコピー，さらには海外旅行での領収書や私信など，個人文書も多数含まれていました。増田友也は驚嘆すべきメモ魔で，読んだもの，考えたことを，生真面目な小さな文字で，早朝，日中，深夜を問わず，みっちりノートに書きつけています。しかも，誰かに見せることを想定していたかのように，色とりどりにペンの色を変え，線や枠を入れ，グラフィカルな紙面に仕立て上げられたものもあり［写真 2］，そこには日本の古建築，道元，ハイデガーなどについての詳細な研究ノート，あるいは建築が空間となり風景となるその根拠を探る日々の思索が記されています。

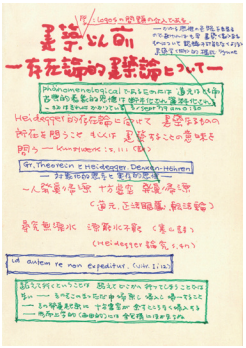


写真 2：ノート（1978 年頃）

これらの資料は，京都大学研究資源アーカイブの研究資源化プロジェクト（2017–2019 年度）により整理と目録作成が進められました。建築資料のアーカイブ化はいま全国の著名な建築家について生じている課題ですが，明確な整理方法はいまだ確立されていません。そうしたなか，増田友也の資料については，研究資源アーカイブの齋藤歩特定助教の尽力によって精密な目録が作成され，資料の整理保存方法も整備することができました。今回の展覧会では増田友也というひとりの建築家の活動を紹介しますが，同時にアーカイブ化された建築資料を披露することも目的としています。

展覧会の構成

展覧会は増田友也の生涯を辿りながら 5 章で構成されています。増田は 66 歳で亡くなりましたが，大学卒業後の青年時代はちょうど太平洋戦争の時代と重なってしまいました。満州に渡ると，最前線での戦闘は免れ，コンクリート船の技術開発に携わっています。増田とコンクリートの出会いはこの時に遡ります。敗戦後，内地に帰還するとすぐに京都大学の講師に採用されました。おそらく，学生時代からその才能は際立っていたのでしょう。第 1 章では，卒業論文，卒業設計を中心に増田の青年時代を紹介します。

第 2 章では，増田の建築家として，そして建築論研究者としてのスタートを見ていきます。建築家としては，まず自宅の設計から始め，京大教授の住宅などを次々に手掛けました。転機は 1956 年の長崎市庁舎設計競技で訪れます。増田は 2 等入選を果たすと，翌年，故郷の淡路島で南淡町庁舎を完成させ，以後，数々の市庁舎や公会堂，体育館，上下水道施設を実現させます［写真 3］。それらの作品で追求されたのは鉄筋コンクリートによる日本的な建築空間で，そのバックボーンとして，増田は日本の伝統的住宅の研究に着手しました。そしてさらに原始的な建築空間を求め，オーストラリアやインドの先住民族の仮設的な儀場や小屋を対象に，現象する空間の意味を分析し博士論文を書き上げました。

第 3 章では，高度経済成長期の活動を概観します。1960 年代に入ると，日本中が建設ラッシュに沸き，美しい国土が次々に失われます。増田にとって問題は風景の再生でした。増田は厳島神社の古代的な風景や夢窓疎石の中世の石庭をとおして日本の風景の本質を探り，一方で京大会館と称する一大施設の計画に全力で取り組みました［写真 4］。京都大学吉田キャンパス西部地区に予定されたこの壮大な計画は，完成していれば京都大学の新しい風景になったことでしょう。しかし，吹き荒れる学園紛争のあおりを受け，計画は大幅に縮小され，現在の総合体育館となりました。



写真 3：鳴門市庁舎（1963 年）

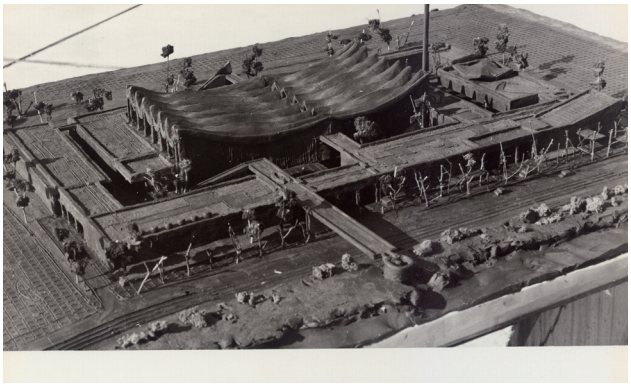


写真 4：京大会館計画案（1967 年）

第 4 章は，1970 年代から最晩年までを取り上げます。1970 年の大阪万博のあと，日本はオイルショックに見舞われ建設ラッシュも過ぎ去ります。しかし幸運にも，増田は京大法学部出身で鳴門市長の谷光次との交友関係から，鳴門市の公共施設の設計を次々に受託しました。幼稚園，小学校，中学校，老人福祉センター，勤労青少年ホームを実現させ，最後に鳴門市文化会館に全力を注ぎ，これが遺作となりました［写真 5］。平坦な塩田跡地から，すらっと立ち上がる縦長のコンクリート製ルーバーで包まれたこの建物は，建築が立ち現れるその始まりを探究した増田の建築論をみごとに具現化しています。増田が鳴門に残した建築作品は，いまでも心に訴えかける力強さを保ち，人々に愛され続けています。第 5 章には，鳴門市の増田建築の現在が展示されています。



写真 5：左＝鳴門市文化会館（1982 年），右＝鳴門市勤労青少年ホーム（現・健康福祉交流センター，1975 年）

展覧会実行委員会のメンバー一同は，限られた時間のなか手分けして資料の調査にあたり，増田友也というバイタリティーに満ちあふれる建築家・建築論研究者の全貌を捉えようと努めました。その成果は，近いうちに増田友也建築作品集として出版する予定です。アーカイブ化作業や展覧会の開催には多大な労力を要しますが，こうした作業をとおして研究が大きく前進しました。先学が残した資料のアーカイブ化の意義をあらためて強く感じています。

（工学研究科　教授／本展実行委員長　田路貴浩）

資料情報（写真 1）＝［智積院会館 施工現場］，Ar MIXED 2017/2/S2/05/048.
資料情報（写真 2）＝手稿（ノート），Ar MIXED 2017/2/S1/062.
提供（写真 3）＝鳴門市
資料情報（写真 4）＝［MECK Ⅲ，MHK19650515，粘土模型写真（京大会館）］, Ar MIXED 2017/2/S3/05/009.
撮影（写真 5）＝橋本敏和（2021 年）
出典（写真 1, 2, 4）＝増田友也建築設計関係資料 , 1938–1984（主年代 1950–1981）, 京都大学（所蔵＝京都大学大学院工学研究科建築学専攻 , 画像提供＝京都大学研究資源アーカイブ）.

総合博物館コレクション研究〈13〉

魚類相研究と標本

京都大学には，総合博物館とフィールド科学教育研究センター舞鶴水産実験所が共同で管理する魚類標本コレクションがある。本コレクションでは，アクロニムである FAKU（Faculty of Agriculture, Kyoto University）のもとでロット毎に番号が振られ，現在約 20 万件が登録されている。1 ロットには 1 から数十個体が含まれていることから，総個体数はおおよそ 40 万以上と見込まれる[*1]。本コレクションは，京都大学の初代農学部水産学科教授である松原喜代松博士（1947 年着任）によって収集された標本群から始まっており，今に至るまで国内外からの魚類標本の収集と登録が続けられ，現在総合博物館に約 5 万件，舞鶴水産実験所に約 15 万件が収蔵されている。総合博物館に収蔵されているロットの中には，フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所（和歌山県白浜町）の周辺で収集された標本群[*2]や，琵琶湖産魚類の標本群といった，ある地域に注目して収集された標本も少なくない。本稿では，四国南西部における魚類相研究のために収集された標本群を紹介する。

＊　　＊　　＊

魚類相とは，ある海域や地域にみられる（あるいは出現記録のある）全魚種を総括して指す用語である。魚類相を明らかにした研究成果は，論文やチェックリスト（種名の一覧）として公開される場合が多いが，一般に広く流通する図鑑として出版される場合もある。2001 年出版の図鑑「以布利 黒潮の魚――ジンベエザメからマンボウまで」は，京都大学，高知大学および大阪の海遊館から集まった研究者が中心となり，高知県土佐清水市以布利地区の周辺海域における魚類相を明らかにした成果に基づいている[*3]。四国南端である足摺岬の，その付け根に位置する以布利漁港では，チョウチョウウオ科，スズメダイ科およびテンジクダイ科に代表される，暖海性あるいは南方系の魚種が多くみられる。さらに，以布利沖の定置網には世界最大級の魚類であるジンベエザメもしばしば入網していることから，以布利の周辺海域は本種の回遊ルートに含まれている可能性が高い。この以布利の周辺海域は，南方からの暖流である黒潮の影響を強く受けていると考えられ，日本列島の魚類分布に対する潮流の影響を考えるうえで本地域の魚類相の情報は重要といえるだろう。

しかし，特に海域においては，魚類相の解明は大変な労力と時間を要する。広大な海中を泳ぎ回る魚を，なんらかの方法で収集するか，少なくとも撮影し，種毎の出現記録を積み重ねる必要があるためである。本書によると，編著者・著者を含む延べ 31 名以上が分担しつつ，1997 年 11 月から 2000 年 10 月にかけて毎月以布利漁港を中心に漁獲物の収集や魚類の採集を行い，加えて 1998 年 4 月から 2000 年 10 月までは潜水調査による生態写真の撮影も行ったとのことである。

この 3 年間にわたるプロジェクトにより，136 科 567 種が記録され，そのうち 436 種は標本として収集された。これらの標本は京都大学総合博物館と高知大学へ分けられ収蔵されており，魚類分類学の資料としてのみならず，一地域の魚類相を明らかにした標本群として高い資料的価値をもつ。総合博物館では，この以布利の魚類相研究に用いられた標本（証拠標本）は他地域からの標本と共に種毎のスペースに配架されているが，本書内で参照されている以布利産標本であることは，ラベルや標本番号からすぐにわかる（図 1）。



図 1：ヤマトカマスの配架スペース

魚類相の解明は，学名のない魚（未記載種）や，日本に生息していることが知られていなかった種の発見にも繋がる。以布利での魚類相調査において，学名が明らかでないカマスの仲間が発見され，本書内でイブリカマスという標準和名が与えられた。のちにこの魚は，総合博物館収蔵の標本（図 2）に基づいて新種として記載され，その学名は以布利に因み *Sphyraena iburiensis* と命名されている[*4]。センニンフグ（フグ科サバフグ属）に似た日本未記録種（図 3）も発見され，本書内でカイユウセンニンフグという標準和名が提唱されている。この



図 2：イブリカマスの標本



図 3：カイユウセンニンフグ（a）とセンニンフグ（b）の標本

“カイユウ”は，調査の一翼を担った海遊館に因むと考えられるが，本種が沖合で回遊しているとの推察にも因んだ掛け詞であるのかもしれない。イブリカマスは，以布利で発見されたのちに，伊豆諸島から八重山諸島にかけて分布することが明らかとなり[*5]，紅海からも本種とされる写真記録がある[*6]。またカイユウセンニンフグも，以布利での発見以前に知られていた分布域（紅海や地中海）に加え，南日本からオーストラリアにかけての西部太平洋域に広く分布することが判明している[*7]。このように，ある地域における魚類相調査によって新たな日本産魚類が発見され，それが契機となって他地域においてもその魚種が次々と発見・報告される例は少なくない。

＊　＊　＊

魚類相情報の重要性が高まるのに伴い，既存標本の重要性も以前にも増して高まっている[*8]。最近では，与那国島，奄美群島および口永良部島などの黒潮流路付近に位置する島嶼の魚類相が矢継ぎ早に発表されている。また，実地調査による標本収集を踏まえて博物館や大学に収蔵されている既存標本も確認することで，高い信頼性と網羅性を保証している[*9-11]。今後も，総合博物館を含む各地の博物館や大学にある既存標本の情報を積み重ねることで，様々な海域の魚類相の解明が進むだろう。標本に紐づいた，信頼性の高い魚類相の知見は，日本にどのような魚がいるのかというシンプルな問いのみならず，潮流や気候の影響を受けつつ日本全体の魚類相がどのように形作られているか，そしてどのように移り変わっているかの解明に繋がると期待される。

（総合博物館　研究員　佐藤真央）

[*1] Kai Y.（2015）「Fish collection and ichthyology at Kyoto University: for more than half-century, Maizuru Fisheries Research Station have obtained and kept enormous specimens」Kyoto University Research Activities, 5: 9–13.

[*2] 佐藤 崇（2019）「瀬戸臨海実験所魚類標本－コレクションの全容把握を目指して」京都大学総合博物館ニュースレター，45：8–9.

[*3] 中坊徹次・町田吉彦・山岡耕作・西田清徳（編）（2001）「以布利 黒潮の魚――ジンベエザメからマンボウまで」大阪海遊館，300pp.

[*4] Doiuchi R., Nakabo T.（2005）「The *Sphyraena obtusata* group (Perciformes: Sphyraenidae) with a description of a new species from southern Japan」Ichthyological Research, 52: 132–151.

[*5] Hata H., Iwatsubo H., Yamada M., Maekawa T., Motomura H.（2017）「First records of *Sphyraena iburiensis* (Perciformes: Sphyraenidae) from the Amami Islands and southern Kyushu, Japan」Biogeography, 19: 10–16.

[*6] Doiuchi R., Bogorodsky S. V., Nakabo T.（2011）「An underwater photograph of *Sphyraena iburiensis* (Perciformes: Sphyraenidae) from the Red Sea: first record outside Japanese waters」Ichthyological Research, 58: 99–100.

[*7] 岩坪洸樹・伊東正英・中尾和成・目黒昌利・松沼瑞樹・本村浩之（2009）「南九州から得られたカイユウセンニンフグ *Lagocephalus suezensis*（フグ目：フグ科）」日本生物地理学会会報，64：21–27.

[*8] 田城文人・鈴木啓太・上野陽一郎・舩越裕紀・池口新一郎・宮津エネルギー研究所水族館・甲斐嘉晃（2017）「近年日本海南西部海域で得られた魚類に関する生物地理学的・分類学的新知見―再現性を担保した日本海産魚類相の解明に向けた取り組み―」タクサ：日本動物分類学会誌，42：22–40.

[*9] Koeda K., Hibino Y., Yoshida T., Kimura Y., Miki R., Kunishima T., Sasaki D., Furukawa T., Sakurai M., Eguchi K., Suzuki H., Inaba T., Uejo T., Tanaka S., Fujisawa M., Wada H., Uchiyama T.（2016）「Annotated checklist of fishes of Yonagunijima Island, the westernmost island in Japan」The Kagoshima University Museum, i + 119 pp.

[*10] 木村祐貴・日比野友亮・三木涼平・峯苫 健・小枝圭太（編）（2017）緑の火山 口永良部島の魚類 . 鹿児島大学総合研究博物館，200 pp.

[*11] 本村浩之・萩原清司・瀬能 宏・中江雅典（編）（2018）奄美群島の魚類 . 鹿児島大学総合研究博物館, 横須賀市自然・人文博物館，神奈川県立生命の星・地球博物館，国立科学博物館，414 pp.

《謝辞》 本稿の作成にご協力していただいた甲斐嘉晃博士（京都大学フィールド科学教育研究センター）に深謝する。

企画展「医師になる！ 京都大学の医学教育」オンライン講演会

2021 年 8 月 22 日（日），9 月 12 日（日），26 日（日）

2021 年度企画展「医師になる！ 京都大学の医学教育」（会期：7 月 21 日～ 10 月 10 日）の関連講演会を 8 月 22 日，9 月 12 日，26 日にオンライン会議システム Zoom を用いて開催しました。

本展は，京都大学医学部創立当初から昭和初期にかけて使用された教材と現在使用されている教材や実習の様子を紹介した動画，カリキュラムを展示し，120 年以上にわたり医学と医療技術の発達による医学教育の変化を紹介しました。博物館入館の人数制限がある中，会期中は 2,889 名にご来館いただきました。



講演会では，企画展実行委員および展示資料に造詣の深い先生 3 名に「医学の歴史」（日合弘／京都大学名誉教授），「これからの医学教育の方向性～医学教育に何が求められているのか～」（小西靖彦／京都大学医学研究科 医学教育・国際化推進センター教授），「日韓における近代医学教育の歩み」（Kyu Won LEE ／ソウル大学校医科大学医学科客員教授）についてそれぞれご講演いただきました。

「医学の歴史」では，古代オリエント時代から 21 世紀の医学まで，「これからの医学教育の方向性」では，現在の日本の医学教育課程と京都大学医学部のプログラムについて分かりやすくご紹介いただきました。「日韓における近代医学教育の歩み」では，日本と韓国の医師になるための教育課程を比較しながらご紹介いただきました。

講演会には，中学生や医療従事者を含む幅広い層からご参加いただき医学・医療への関心の高さを感じました。

（総合博物館 研究員　中川千種）

白眉研究者の紹介　白眉センター・特定助教　東島 沙弥佳　10 月 1 日着任

10 月から京都大学で研究を始めました，東島と申します。私は若手研究者育成を目的とする白眉センターという組織に所属をしていますが，実質的な研究は受入部局である総合博物館にて実施します。

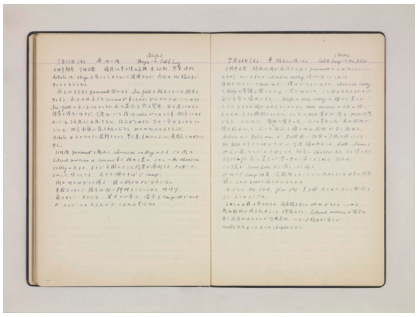
突然ですが，「しっぽ」と言われれば皆さんはどういうものを想像されるでしょうか？　お家にいるイヌやネコのふわふわなしっぽでしょうか。あるいは，動物園にいるような動物たちのしっぽ？　もしかしたら，切れてうねうねと動くトカゲのしっぽを思い浮かべる方もいるかもしれません。きっと皆さんの思い描いたしっぽは十人十色だと思います。動物たちはそのようにさまざまな形のしっぽを，非常に便利に使って生活しています。だから，しっぽの形を見ることで我々は，その生き物がどのような環境に適応してきたか，どのような先祖から進化してきたのかを知ることができます。しかし，そんな我々のお尻には残念なことにしっぽが生えていません。不思議ですね。これこそが，私の研究テーマです。すなわち，我々が失くしてしまったしっぽという存在こそが，我々がどのようにして「ひと」となったのかを知るための鍵だと私は考えています。



我々を指す「ひと」というのはシンプルな言葉ですが，生物学的な種としての「ヒト」と人間性を備えた存在としての「人」という 2 つの意味を包含しています。これら 2 つの成り立ちを知るには，生物の持つ形の様性を知りその形成過程を知るための生物学的な研究アプローチ，そして人間が残してきた歴史・民俗資料を読み解くことにより認知の変遷を知るための人文学的アプローチの両方が必要となります。人文学と生物学という異なる視点からしっぽの喪失という一つの事象を考える「しっぽ学（Shippology）」を私はここ総合博物館から発信していきたいと考えています。

研究資源アーカイブ通信〈23〉（2020年10月～2021年9月）

【2020年度】
2020年10月7日：医学研究科（脳統合イメージング分野）にて調査
10月21日：鳴門市市民会館アーカイブ展「じゃあ、ね。」展チラシに，「増田友也建築設計関係資料，1938–1984（主年代1950–1981）」画像提供
10月25日：桑野梓「キリシタン遺物から見る大阪・北摂地域のキリスト教受容」（『季刊民族学』174号）に，「京都大学総合博物館蔵キリシタン関係資料，ca. 1920–2004」画像提供
11月13日：国立近現代建築資料館「第2回近現代建築アーカイブズ講習会」受講（西村，平澤）
11月17日：満田衛資「日本の近代建築を支えた構造家たち 第6回：坂静雄――我が国にシェル理論を伝えた鉄筋コンクリート界の大家」（『建築技術』851号）に，「増田友也建築設計関係資料，1938–1984（主年代1950–1981）」画像提供
11月18日～19日：国立女性教育会館「アーカイブ保存修復研修（基礎コース）」受講（平澤）
11月26日：京都大学理学部にて調査
12月1日：「増田建築群――モダニズム 市民の心打つ」（『読売新聞』夕刊）に，「増田友也建築設計関係資料，1938–1984（主年代1950–1981）」画像提供
同日：京都大学農学研究科（植物遺伝学分野研究室）にて調査
12月7日～9日：京都大学防災研究所附属火山活動研究センター桜島火山観測所にて調査
12月25日：『京都大学総合博物館ニュースレター』50号に，「研究資源アーカイブ通信〈20〉活動報告（2019年10月～2020年9月）」掲載
2021年1月6日～3月7日：京都国立近代美術館「分離派建築会100年 建築は芸術か？」展に，「京都帝国大学工学部建築学教室35mmフィルム：実写 関東地方大震災[, 1923.]」映像提供
1月10日～19日：高槻市広報番組「情報BOXワイドたかつき」に，「京都大学考古学研究室写真：阿武山古墳調査，1934, 1987」画像提供
1月13日～3月14日：京都大学総合博物館「梅棹忠夫生誕100周年記念 知的生産のフロンティア」展に，「京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊地質班関係資料，1955–1956」貸出



2月25日：『明解世界史図説 エスカリエ（十三訂版）』（帝国書院）に，「京都大学総合博物館蔵キリシタン関係資料，ca. 1920–2004」画像提供
3月1日：藤田恒春「続・小堀遠州のいた場所 第57回：椿のこと 伏見」（『遠州』658号）に，「京都大学総合博物館蔵キリシタン関係資料，ca. 1920-2004」画像提供
3月30日：『人物でよみとく化学』（朝日学生新聞社）に，「京都大学化学研究所「ビニロン」関係資料[, ca.1942–1943]」画像提供
同日：研究資源アーカイブ運営委員会（第20回）開催（次年度事業検討，研究資源化プロジェクト2件新規採択）
3月31日：『京都大学建築学100年の歩み』（京都大学学術出版会）に，「増田友也建築設計関係資料，1938–1984（主年代1950–1981）」画像提供
同日：『京都大学総合博物館ニュースレター』51号に，「研究資源アーカイブ通信〈21〉五島敏芳『臨時休館後に再開した映像ステーション／Peekデジタルコレクション KURENAI登録』」掲載

【2021年度】
4月9日：京都大学施設部に，「増田友也建築設計関係資料，1938–1984（主年代1950–1981）」画像提供
4月30日：奈良文化財研究所飛鳥資料館に，「京都帝国大学文学部考古学教室ガラス乾板写真：石舞台古墳発掘，1933–1935」画像提供
5月17日：京都大学農学研究科にて調査
5月31日：『唐長安 大明宮』（ゆまに書房）に，「田中淡建築庭園写真，1970–2003」画像提供
6月30日：京都大学数理解析研究所（図書室）にて調査
8月23日～25日：国立公文書館「アーカイブズ研修Ⅰ（基礎コース）」受講（五島，平澤，上羽）
8月25日：『京都大学総合博物館ニュースレター』52号に，「研究資源アーカイブ通信〈22〉アーカイブズと私（3）高井たかね先生に聞く『田中淡建築庭園写真，1970–2003』（聞き手：齋藤歩）」掲載
8月31日：『明日香法制定40周年記念誌』（奈良県明日香村）に，「京都帝国大学文学部考古学教室ガラス乾板写真：石舞台古墳発掘，1933–1935」画像提供
9月9日：2022年度実施分「研究資源化プロジェクト」説明相談会（オンライン）開催



9月25日～12月26日：京都市京セラ美術館「モダン建築の京都」展に，「増田友也建築設計関係資料，1938–1984（主年代1950–1981）」画像提供

（総合博物館　上羽真弓）

総合博物館日誌（2021 年 7 月～ 10 月）

展 示

▶ 2021 年度企画展
「医師になる！ 京都大学の医学教育」
2021 年 7 月 21 日（水）～ 10 月 10 日（日）
［関連講演会］＊ Zoom によるオンライン開催
・第 1 回「医学の歴史」／ 8 月 22 日（日）
　日合 弘（京都大学名誉教授）
・第 2 回「これからの医学教育の方向性～医学教育に何が求められているのか～」／ 9 月 12 日（日）
　小西靖彦（京都大学医学研究科 医学教育・国際化推進センター）
・第 3 回「日韓における近代医学教育の歩み」／ 9 月 26 日（日）
　Kyu Won LEE（ソウル大学校医科大学医学科）

▶ 2021 年度企画展「増田友也の建築世界――アーカイブズにみる思索の軌跡」
2021 年 10 月 27 日（水）～ 12 月 12 日（日）
［関連イベント］＊ Zoom ウェビナーによるオンライン開催
・資料解説 01「増田友也――アーカイブズが開く建築世界」／ 10 月 30 日（土）
　齋藤 歩（京都大学総合博物館）「アーカイブズをつくる」
　本橋 仁（京都国立近代美術館）「アーカイブズをみせる」
　田路貴浩（京都大学工学研究科）「増田友也――あるモダニズム建築家の思索と制作」

ロビー展示

▶ NAS 鳴門アーカイブススタジオ「アップサイクル・プロジェクト」（企画展「増田友也の建築世界」にあわせたロビー展示）
2021 年 10 月 27 日（水）～ 12 月 12 日（日）
・鳴門市市民会館（2021 年解体）の部材（観客席座面）を再利用して製作されたベンチを，京都大学総合体育館（1972 年）に向けて観覧者が実際に座れるように設置した（右写真）。

レクチャーシリーズ

・第 156 回　京都の竹久夢二とロマン主義―花街・南蛮・彦乃
　高木博志（京都大学人文科学研究所）
　2021 年 7 月 3 日（土）　＊ Zoom によるオンライン開催

博物館セミナー

・第 113 回　火星隕石から探る火星上での天体衝突現象
　竹之内惇志（京都大学総合博物館）
　2021 年 7 月 16 日（金）　＊ Zoom によるオンライン開催

展示協力（学術標本資料の貸出）

・京都国立博物館（1 点）　特別展「京（みやこ）の国宝－守り伝える日本のたから－」
　2021 年 7 月 24 日（土）～ 9 月 12 日（日）
・大分県立歴史博物館（2 点）　開館 40 周年記念 令和 3 年度特別展「赤塚古墳と三角縁神獣鏡～宇佐風土記の丘からみた古墳時代～」
　2021 年 10 月 15 日（金）～ 11 月 28 日（日）

入館者数

3,690 名　（うち特別観覧　7 団体，205 名）
＊ 2021 年 8 月 20 日～ 9 月 30 日：京都府において新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言発出，臨時閉館はなし



1 階ロビー展示（総合体育館を望む）

入館のご予約についてのお知らせ

2021 年 11 月現在，入館は事前予約制により受付けております。ご来館の折には当館ホームページにて最新の状況を必ずご確認ください。子ども博物館は毎週土曜日に実施しています。

発行日　2021 年 11 月 30 日
編集・発行　京都大学総合博物館　電話　075-753-3272
〒 606-8501　京都市左京区吉田本町　FAX　075-753-3277
http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/